

Passion Evolution Tradition

輝く職人の情熱 進化し続ける伝統

職人が込めた想いが輝く 十器十輝

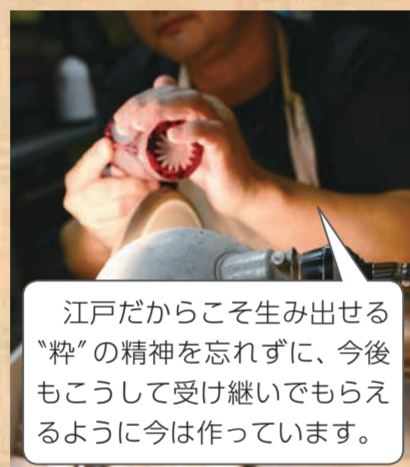
すみだ江戸切子館で
切子の世界に浸る



江戸切子は、透明な硝子の上に青や赤の硝子が被せてあります。その色被せ硝子素材に、紋様の削り出しを行い、カット(切子)していきます。最後に丹念に手磨きをして作品を作り上げます。



江戸切子の製作は、作品を作るための教科書がないところで同じ素材を作ります。きめ細かい模様の作品を1日に4つ〜6つほど、「体力」と「感覚」だけを頼りに製作しているそうです。また、たくさんの種類の模様があるので、押し当てる強さと時間で深さを調節するなど、長い年月を経て得た技術で美しい江戸切子を作っているとわかりました。



江戸だからこそ生み出せる「粋」の精神を忘れずに、今後もこうして受け継いでもらえるように今は作っています。

最近、この江戸切子は若者や女性、外国人観光客に人気が出てきているそうです。そんななか期待されているのが、「現代風アレンジ」です。江戸の「技」・日本の「粋」はそのままに、見る人をあっと言わせるような作品がそろっています。



和 イン グラス

普通の生活でも使えるようなグラスに、涼しげな藍色の江戸紋様をモチーフとして取り入れています。西洋の食器と和の文化、この2つがきれいに融合している作品です。

東京スカイツリー®クリスタルタワー

光の屈折や角度の試行錯誤を繰り返し、辿りついたのがこの輝くタワーだったそうです。スカイツリー建設を記念して作られたこの作品に、職人の腕前が光ります。



市松模様のコップ

2020年東京オリンピック・パラリンピックのエンブレムにも使われている市松模様が印象的です。このような模様を鮮やかな色やカットデザインで表現することで外国の方にも日本文化に触れてもらいやすい工夫がされています。

宝石のように輝く江戸切子の世界に、皆さんも浸ってみてはいかがでしょうか。

記事作成 内田侑里さん、鈴木時歩さん

陰に隠された神技 張ることを極めた伝統

江戸表具

表具とは、生活の中で身近にある襖や屏風、掛け軸などのこと、またはそれらを仕立てる技のことです。仏教伝来とともに伝わった、経典の表装技術が元になっていて、お客様からお預かりした書や絵画などの作品をより立派にみせたり、仕立て直しをして、より美しくみせたりするところに活かされています。この技術は、伝わってきた時のまま、ほとんど変化していないそうです。



表から見えないところに職人の神技が!

毛の硬さや種類が違う刷毛を使い分けます。

作るものによって、作業の工程は変わってきますが、屏風では、骨組みに何枚もの和紙を張り重ね強度を出すための下張り、柄や作品などを張る上張り、骨と骨をつなぎ、たためるようにする「つがい」の取付け、「つがい」の合わせ目に当たる「おぜ」の仕上げ張り、「縁」や「飾り金具」の取付けなど、たくさんの工程があります。下張りは外からは見えませんが、6回も繰り返します。

これらの作業では、工程ごとに刷毛などの道具や紙をいくつも使い分けています。作業は全て手作業なのですが、とても精密で狂いが全くありません。昔ながらの技も、手作業ならではの温かさも味わえるのが、表具の魅力です。



左の写真は、屏風や掛け軸を作る際に出来た「端切れ」を活用した「カードケース」です。端切れをそのまま捨ててしまうのはもったいないところから、表具の技術を活用し、張り合わせています。その他にも、浴衣の端切れを活用して「お薬手帳入れ」を作るなど、江戸時代からの表具の技術を身近な小物作りにも活かしています。

そのほかにも、現代風の部屋に合うように装丁の柄を考えたり、エアコンの風に当たっても大丈夫のように張り合わせたりするなど、現代の生活スタイルに合わせた工夫をしています。

江戸表具職人 前川治さん



お客様のことを第一に、どう仕立て上げたら喜んでいただけるかをいつも考えています。

記事作成 田川雄大さん、松井双葉さん

何もないところから 世界に一つだけの木目込を

江戸木目込人形とは、人形が着物を着ているように見える伝統工芸品です。通常の木目込人形は西陣織の布を使用していますが、塚田工房では100年前の実際の着物の生地を活用しています。これは今の布と異なり、染物が天然素材で作られているため、色に和の落ち着きを感じることができるからです。

このお店の品物は90%をお客様が占めています。「生まれてきた女の子が無事に大きく育ててほしい」という想いから購入されるお客様が多いそうです。



1つのモノにストーリーを

最近では、人形のように飾っておくだけでなく、誰でも使えるものへと形を変えてきています。例えば、木目込の技術で作ったスマホスタンドもその一つです。上の写真の左から2番目のスマホスタンドは、隅田川と富士山をイメージして作られています。

これは、塚田さんが子どものころに見ていた景色が元になっています。最近では外国人観光客も増えているので、お相撲さんの人形や、桐の箱に木目込をするなど、お土産用としても作られています。



職人に終点は
ありません。

木目込職人 塚田録春さん

「デザインを考える時が一番楽しい」と語る塚田さん。ただの木材の状態から、様々なアイデアを凝らし、1つの木目込を作り上げます。1つ1つ大切に作られた木目込は、どれもオリジナリティに溢れていました。「何もないところから、世界に1つだけの木目込を」——木目込には、職人さんの情熱と高い技術、そして遊び心が詰まっています。



記事作成 赤間仁咲さん、小野 ありささん
西本宋里さん

漆 麗し 古代からのロマン



安宅漆工店 安宅 信太郎さん

16歳より漆の道に入りました。父の死後24歳で後を継ぎ、有名な寺院、建築物等の漆工や文化財の修復に取り組んできました。取材の中で、「漆を現代にどう息づかしていくかが大事」と話していました。制作の中で一番うれしいときは、漆の良さが作品の表面に出たときだそうです。若くして父の後を継ぎ、苦勞を重ねてきた安宅さん。作品には熟練の技が光っています。



田区は、「すみだモダン」といって、クオリティの高い商品をブランド認証しています。それに、2014年度、14個の商品が認証され、その1つに選ばれたのが、この「本漆塗りマグカップ」です。木でできているため、持つとふわりと軽く、握力の少ないお年寄りの方など、人に優しくできています。また、伝統的で高価な漆塗りは、買っても「もったいない」という気持ちから、あまり使ってもらえないそうです。そこで、安宅さんは、日常の中で気軽に使える本物として、このマグカップを作りました。漆が削り出すなんともいえない輝きと温もりが魅力的です。



落ち着いた美しいランプシェード(漆灯)。漆のシックな風合いと青海波の紋様や富士の柄が「和モダン」を演出しています。電気を消すと真っ暗でも何も見えませんが、灯りが灯されるとたちまち美しい絵が浮かび上がります。この作品はデザイナーと安宅氏による共同作品で、世界からも注目を浴びており、芸術の都パリや、ロンドンへの展示も決まっています。



漆塗りの竹籠(左)と花瓶(右)

マメ知識!

▶漆を乾かすのは湿度60%~70%、気温20℃以上で春と秋が最適です。
▶漆の歴史は遡ること1万5000年前。石器時代から接着剤として使われていました。

記事作成 菊池桃乃さん、黒木康介さん
富田葉月さん